＜小学校　国語＞

読むことの能力を育てるための指導の工夫

－「声に出して読むこと」を通して－

東風平町立東風平小学校教諭　　大　城　明　海

内容要約

はっきりとした発音で読むことができるようにするとともに，意味内容が明瞭になるように，拾い読みでなくひとまとまりの語や文として読むことができるようにするために，学習過程に，「声に出して読むこと」を効果的に取り入れる工夫をした。

その結果，姿勢や口形，声の大きさを意識しながら文章を読むようになった。また，句読点に気をつけて文章をスラスラ読めるようになった。さらに，読むことの能力を高めたことで内容理解まで促すことができた。

【キーワード】　読むことの能力　声に出して読むこと　発声・発音練習　形態の工夫

目　　次

Ⅰ　テーマ設定の理由 …… 1

Ⅱ　研究内容 …… 2
　1　「読むこと」とは …… 2
　2　「声に出して読むこと」について …… 2

Ⅲ　授業実践 …… 6
　1　単元名 …… 6
　2　教材名 …… 6
　3　単元設定の理由 …… 6
　4　単元の指導目標 …… 7
　5　単元の指導と評価計画 …… 7
　6　本時の指導 …… 8
　7　授業仮説の検証 …… 9

Ⅳ　研究全体の考察 …… 9
　1　はっきりとした発音で文章を読むことができたか …… 9
　2　意味内容が明瞭になるように，ひとまとまりの語や文として読むことができたか …… 10

Ⅴ　研究の成果と今後の課題 …… 10
　1　研究の成果 …… 10
　2　今後の課題 …… 10

＜小学校　国語＞

読むことの能力を育てるための指導の工夫

－「声に出して読むこと」を通して－

東風平町立東風平小学校教諭　　大　城　明　海

Ⅰ　テーマ設定の理由

すべての学習において，文章を読むことは基礎的・基本的な技能である。文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」の中で，「音読をする事によって漢字の読み書きを覚えたり，文章の内容を確実に理解したりできる。」と述べられた。また，小学校学習指導要領国語科低学年の「C 読むこと」の目標には，「書かれている事柄の順序や場面の様子などに気づきながら，読むことができるようにする。」とある。②内容(1)エでは「語や文としてまとまりや内容，響きなどについて考えながら声に出して読むこと。」と明記されている。それは「はっきりとした発音で文章を読むことができるようにするとともに，意味内容が明瞭になるように，拾い読みでなくひとまとまりの語や文として読むことができようにする。」ことである。すなわち，小学校低学年のうちから，内容理解のために文章をスラスラ読めるようにすることが，国語科に求められていることである。

これまでの国語科における読みの授業実践を振り返ると，登場人物の気持ちを想像する読み取りを行い，役割読みをさせ，劇やペープサートなどの発表会をするという展開が中心であった。児童は活動を楽しみ，生き生きと授業に取り組んでいた。しかし，新しい単元に入るときに，一字ずつ拾い読みをしたり，分かち書きで切って読むなど，読みの基礎が定着していない児童が見られた。また，読むこと自体に苦手意識があり，一人で行う「声に出して読むこと」では，声が小さくなり，進んで活動ができなかったりと消極的になりがちでもあった。その原因として，詳細な読解が中心となり，「声に出して読むこと」の指導が十分でなかったことが挙げられる。

低学年において，文章を理解するためには，語と語，文と文のまとまりを考えながら，「声に出して読むこと」が大切になる。「声に出して読むこと」によって，一つ一つの言葉や表現のよさに気付き，内容理解ができるようになると考える。そこで，児童が好む文学的文章教材において，「声に出して読むこと」を効果的に取り入れ指導を行う。まず，第一次では教師の範読を聞かせること，「声に出して読むこと」の機会を多く取り入れる工夫をすること，姿勢，口形や発音を重点的に指導すること，第二次から導入時に発音・発声練習を入れることで，はっきりとした発音で文章を読むことができるようにしたい。第二次では，一単位時間の中に交代読みや一人読みなどの「声に出して読むこと」のいろいろな形態を取り入れる工夫を行うことで，意味内容が明瞭になるように，拾い読みではなくひとまとまりの語や文として読むことができるようしたい。そして，「声に出して読むこと」のねらいである内容理解までできるようにしたい。

よって，本研究においては，文学的文章教材「スイミー」の授業を通して，「声に出して読むこと」の指導を工夫することにより，読むことの能力を育てることができるであろうと考え，本テーマを設定した。

＜研究仮説＞

文学的文章教材の学習を展開する中で，次のような「声に出して読むこと」の指導の工夫を行えば，読むことの能力が育つであろう。

①　はっきりとした発音で文章を読むことができるようにするために，第一次では，教師の範読を聞かせ，「声に出して読むこと」の機会を多く取り入れる工夫をし，第二次から毎時間の導入時で，発声・発音練習を入れる。

②　意味内容が明瞭になるように，拾い読みでなくひとまとまりの語や文として読むことができるようにするために，第二次では，交代読みや一人読みなどの「声に出して読むこと」のいろいろな形態を取り入れる工夫をする。

Ⅱ　研究内容

1　「読むこと」とは

「読むこと」には，いろいろな意味がある。主として表記された文字言語を音読，黙読等を通して意味を理解することである。また，読み手が「自分で解釈し，認識を深めていく」積極的な働きをもつ行為としての主体的，創造的な読みとしての意味もある。「読むこと」とは，そのことばを通して考えること，想像すること，課題を解決すること，判断すること等を含めた行為である。国語科における「読むこと」の学習指導も文字・語・文・文章の理解が中心になる。

小学校学習指導要領には，「読むこと」の能力を育てるために，以下の４つの事項について指導するとある。

ア　易しい読み物に興味を持ち，読むこと。

イ　時間的の順序，事柄の順序などを考えながら内容の大体を読むこと。

ウ　場面などの様子について，想像を広げながら読むこと。

エ　語や文としてのまとまりや内容，響きなどについて考えながら声に出して読むこと。

ここでは，エの能力を育てるための指導の工夫を行う。

2　「声に出して読むこと」について

(1) 低学年における「声に出して読むこと」の意義

低学年は，黙読による理解活動が十分でなく，むしろ「声に出して読むこと」，音読による理解活動が生活的である。発達段階からみても「声に出して読むこと」による読速力が高いといえ，文章の意味内容をとらえようとする読みは，「声に出して読むこと」の方が能率が上がるのは低学年の特徴である。文章を「声に出して読むこと」により内容理解がより正確になっていくものと考える。よって，１，２年の低学年時代から「声に出して読むこと」による理解の基礎固めが重要になってくる。

「声に出して読むこと」では，音声を発することを通して行われるので，児童一人一人の学習状況が分かりやすく，指導に生かしやすい。

(2) 「声に出して読むこと」の内容と言語事項の関連

「声に出して読むこと」は，第１学年から第４学年までに重点的に指導するように示されている。表１に示すように，第１学年及び第２学年においては，特にはっきりとした発音で文章を読むことができるようにするために，②言語事項ア発音・発声に関する事項と関連を図りながら，必要に応じて繰り返し練習できるように工夫して指導することが大切となる。

表１「声に出して読むこと」の内容と言語事項の関連

内　　容	②言語事項　ア発音・発声に関する事項
・語や文のまとまりや内容，響きなどについて考えながら声に出して読むこと。	・姿勢，口形などに注意して，はっきりとした発音で話すこと。
ね　ら　い	留　意　点
・はっきりとした発音で文章を読むことができるようにする。 ・意味内容が明瞭になるように拾い読みでなくひとまとまりの語や文として読むようにできるようにする。	・聞き手にはっきりと聞き取れるような明瞭な正しい発音で話すことを身につけさせる。 ・背筋を伸ばした姿勢や，母音「ア・イ・ウ・エ・オ」の口形を適切に指導することにより，安定した発声，はっきりとした発音へ導く。 ・自由に楽しく話すことのできる機会を設けるとともに，お互いの発音・発声のよいところを発見しながら話を聞くようにする。
留　意　点	
・登場人物などの気持ちを声に出して読む際，必要以上に感情を込めて表現しようとする読み方に偏らないようにする。	

(3) 「声に出して読むこと」の利点

「声に出して読むこと」の利点には以下のことが考えられる。

① 音声と形を結びつけて文字を習得させることができる。
② 正しい発音，発声，アクセント等を習得させることができる。
③ 新しい語彙を獲得させることができる。
④ 文章の読解の手がかりをつかませることができる。
⑤ 評価が行いやすい。（スラスラ読める，漢字の読み，理解の度合い）
⑥ 自己評価や相互評価がしやすく，今後の活動に生かせる。
⑦ 主体的な学習が展開しやすい。
⑧ 協同的な学習ができる。（交代読み，役割読み，劇遊びなど）

(4) 「声に出して読むこと」の形態

「声に出して読むこと」には表２のような形態が考えられる。はっきりとした発音で文章を読むことができるようにするため，また，ひとまとまりの語や文として読むことができるようにするために，これらの形態を多く取り入れる工夫をし，組み合わせに変化を持たせて授業を展開する。

表２　「声に出して読むこと」の形態

形　態	活動内容	利　　点	留　意　点
範読を聞く	・これから学習する教材の全体を教師が音読する。	・内容全体をイメージすることができる。 ・新しい言葉や漢字を知ることできる。	※新出漢字や分からない語句をチェックさせながら聞かせる。 ※姿勢や発声が児童の手本となるようにする。
追い読み	・一読点毎，一文章毎，教師やリーダーの後に続けて音読する。	・教師が間違い読みを確認できる。 ・音読のリズム・テンポを覚えることができる。	※読めない児童には，側に行って，読んでいる箇所を指で示したり，近くで読む等の支援を行う。
交代読み	・一文ずつ，１ページずつ，友達同士で交代で音読する。 ・教師対児童で一文ずつの交代で音読する	・教師が漢字の読み間違い，誤読を確認できる。 ・聞かせる相手がいる活動なので多少の緊張感を持ちながら行うことができる。 ・少人数での活動なので，大勢の前では萎縮する児童でも読むことができる。	※教材の特徴やねらいに応じて一対一やグループ内で読み合う形態で行う。 ※教師対で行う時は速読で行う。（内容理解のため） ※活動後に相互評価を入れる。
一斉読み	・全員で音読する。	・全員の声がそろうことにより，一体感や充実感を得ることができる。	※読めない児童には，側に行って，読んでいる箇所を指で示したり，近くで読む等の支援を行う。
一人読み	・一人で一段落，１ページ，全文を音読する。	・教師が漢字の読み間違い，誤読を確認できる。 ・それぞれに行う場合は自分のペースで読むことができる。	※発表形式にするならば，ある程度自信を持たせてから臨ませる。
役割読み	・物語の役割を決めて音読する。	・役の気持ちを考えさせながら行うので内容理解を促すことができる。	※グループ単位の活動で行う。
回し読み	・児童が順々に指名して音読をする。	・緊張感を保ちながら活動ができる。 ・多くの児童が活動に参加できる。	※多くの児童が活動できるようにする。
指名読み	・教師が指名して音読をする。	・教師が児童の読む能力を考えて，読む範囲や読む箇所に配慮しながら，活動を行うことができる。	※児童の実態をしっかり把握して行うようにする。
動作化 劇遊び	・動作を入れながらの読みをする。	・役に成りきって読むことができるため，楽しみながら活動ができる。	※グループ活動が中心となるようにする。 ※発表会を行う。

(5) 「声に出して読むこと」の指導の工夫

① はっきりとした発音で文章を読むことができるようにするための活動

ア 教師の範読

どの児童も「声に出して読むこと」がうまくできるようになるために，教師が「声に出して読むこと」の手本を示すことが有効である。よい音読を聞くことは，いろいろな読み方について説明するより児童に分かりやすい。また，これから，自分が読もうとする文章の読めない文字を，予め自分で知ることができる。範読は２度行う。

イ 「声に出して読むこと」の機会を多く持つ工夫

「声に出して読むこと」の機会を多く持つことで，児童一人一人が「声に出して読むこと」に多く参加できる。追い読みと一斉読み，一人読みは学級全体の児童が短時間で多くの機会が得られる「声に出して読むこと」の形態である。第一次では，これらの「声に出して読むこと」の形態を主とし活動を行う。そして，正しい姿勢，発声の仕方，口形，声の大きさについての指導を重点的に行う。表３は第一次の「声に出して読むこと」の流れである。

表３ 第一次「声の出して読むこと」の流れ

形 態	ね ら い	言語事項との関連と留意点
①範読	・文章の大まかな内容をつかませる。	・正しい発音・発声で範読をする。
②範読	・分からない語句，漢字をチェックさせる。	
③発音・発声指導 ○姿勢図や口形図を見せ，確認する。 ○声の大きさを声の物差しで確認する。 ○発声の仕方，正しい発音については，詩の音読をしながら行う。		
④追い読み	・正しい読みを分からせる。	・声の大きさや姿勢等を褒める。
⑤一斉読み	・全員を活動に参加させる。 ・教師が読み違いを見つける。 ・「声に出して読むこと」の優劣をあまり目立たせないために行う。	・読み間違えた箇所はもう１度読ませる。
⑥一人読み	・自分のペースで読ませる。	・発音が難しい言葉は一斉に発音させる。

ウ 言語事項との関連

発音・発声の指導は第一次で重点的に行う。発音・発声は「声に出して読むこと」の基礎であるので絶えず心がけ，第二次から毎時間の導入でも取り入れていく。発声・発音の指導は口の開きが大切である。姿勢と口形に気をつけながら，明瞭な発音ができるようにする。

そこで，表４姿勢・口形指導内容の組み合わせに変化を持たせて指導を行う。

表４ 姿勢・口形指導内容

姿勢	①立ったときと座ったときの良い姿勢図を確認する。（発音・発声練習は起立した状態で行う） ②教師が手本を見せる。 ③良くできた子を褒める。
口形	①母音の口形図で確認しながら，練習する。（ 鏡を見たり，互いに見合ったりする。） ・唇の体操・・・唇の動きに気をつけて，オエオエ体操をする。 ・舌の体操・・・舌の動きをなめらかに，レロレロ体操をする。
使う材料	①言葉遊び歌を中心としたしたものを扱う。 ②五十音を中心としたものを扱う。 ③早口言葉を中心としたものを扱う。・・・リズムの楽しさを感じさせるため ④教材文で音読しにくい部分を中心としたものを扱う。

② 意味内容が明瞭になるように，拾い読みでなくひとまとまりの語や文として読むことができるようにするための「声に出して読むこと」の形態の工夫

第二次では，表５の流れを基本とし，児童の様子を見ながら，組み替えたり，変化を持たせて指導を行う。

表５　第二次「声に出して読むこと」の形態とねらい及び留意点

形　態	ね　ら　い	言語事項との関連と留意点
①追い読み	・正しい読みを示す。	・発音が難しい言葉は一斉に発音させる。 ・一文読むことは負担も少ない。
②一斉読み又は一人読み	・正しい読みの確認をする。	・相互評価を取り入れる。 （相互評価を行うことでお互いのよかった点やアドバイスを知らせ合うことで，自分の読みに自信が持てるようになってくる。友達の活動を評価しなければならないことでしっかり聞き，自分の読みと比べ，自分の読みに生かすことができる。）
③となりと一文読み	・ある程度の緊張感を持ちながらの活動をさせる。 （「声に出して読むこと」の場面に慣れさせる。）	
④全員で一文読み	・正しい読みの確認をする。	・発音が難しい言葉はみんなで一斉に発音させる。
⑤ｸﾞﾙｰﾌﾟで一文読み	・より緊張感を大きくし，形態に変化を持たせる。	・相互評価を入れる。 ・場面の様子や登場するものの気持ちも考えさせた後，地の文，会話文に分けての活動を行う。 ・句読点に気をつけて読ませる。
⑥ｸﾞﾙｰﾌﾟで役割読み	・意欲を保ちながら，活動させる。 ・内容理解をさせる。	
⑦一人で速読	・内容理解をさせる。	・ゆっくりではなく，速く読むことが大切である。教材文をスラスラ読むことができるのは，内容理解につながっていく。
⑧教師対児童全員 一文交代速読	・読みをより確かなものにする。	・全員で声に出して読む事で，声の響きを感じさせ，一体感を味わわせる。 ・２回目は児童全員が先に読む。
⑨となりと 一文交代速読	・意欲を保ちながら活動させる。	・速読なので，ひとまとまりの文や語になるように気をつけて読ませる。
⑩教師対児童一人 一文交代速読	・読みをより確かなものにする。	・登人物の気持ちになっての読みになるため，理解が深まる。
⑪役割読み	・内容理解を深める。	・必要以上に感情を込めて表現しようとするなどの読みに偏らないようにする。

Ⅲ　授業実践

1　単元名　　本と友だちになろう

2　教材名　　「スイミー」

3　単元設定の理由

(1) 教材観　（省略）

(2) 児童観　（省略）

(3) 指導観

この教材のねらいは，学習指導要領「C読むこと」の②内容(1)エ「語や文としてのまとまりや内容，響きなどについて考えながら声に出して読むこと」ウ「場面の様子などについて，想像を広げながら読むこと」である。また，言語事項(1)のア「発音・発声に関する事項」の「(ア)姿勢，口形などに注意して，はっきりした発音で話すこと。」と関連を図りながら指導する。

そこで，本単元の指導に当たっては「声に出して読むこと」を通して学習を進め，はっきりとした発音で文章を読み，意味内容が明瞭になるように，ひとまとまりの語や文として読むことができる児童を育てることを目指し，次のような手だてを図る。

	ね　ら　い	手　だ　て
第一次	○　はっきりとした発音・発声ができる。	○教師の範読を聞き，正しい発音・発声を感じ取らせる。 ○単元の導入段階で，姿勢図，口形図を見せながら良い姿勢，口形の確認をする。 ○声の物差しを活用する。
	○　はっきりとした発音・発声で文章を読むことができる。	○できた児童はその場で褒める。 ○児童一人一人が「声に出して読むこと」の機会が得られるような形態を多く取り入れ，実態に応じた指導をする。（声かけ，模倣） ○追い読みではっきりとした発音・発声をさせる。 ○一斉読みで読み違いを見つけ，発音が難しい言葉は一斉に発声させる。 ○毎時間活用するワークシートへ相互評価・自己評価の欄を設け，項目に口形，声の大きさ，姿勢を入れ，常に意識させるようにする。
第二次	○　はっきりとした発音・発声ができる。	○毎時間の導入段階で，発音・発声練習を入れる。（詩の音読）
	○　意味内容が明瞭になるように，ひとまとまりの語や文として読むことができる。	○「声に出して読むこと」の形態の工夫。
	・　「声に出して読むこと」に慣れる。	・　児童一人一人が「声に出して読むこと」の機会が得られるような形態を多く取り入れる。
	・　人前で教科書を読むことに慣れる。	・　二人交代読み，グループ交代読み，役割読み，指名読み等の形態を取り入れる。
	・　意欲を継続し，活動に楽しんで取り組む。	・　一単位時間に何種類かの形態を取り入れる。
	・　ひとまとまりの語や文として読むことができる。	・　児童一人一人が「声に出して読むこと」の機会が得られるような形態を多く取り入れる。 ・　句読点に気をつけさせる。 ・　速読を入れる。（適切な速さ）
第三次	○　読む楽しさやおもしろさを味わう。	○アンケートをとり，一人一人の児童が楽しく活動できる形態を選択させて，発表会をもつ。

4　単元の指導目標

○登場人物の気持ちや場面の様子を想像しながら読み，お話の楽しさを味わうことができる。（読むこと　ウ）

○言葉や文としてのまとまり，言葉の持つ響き・リズムを感じ取りながら工夫して，声に出して読むことができる。（読むこと　エ）

○口の開け方や形に注意し，はっきりした発音で読むことができる。（言語に関する知識・理解・技能）

5　単元の指導と評価計画　（11時間）

段階	時	ねらい	主な学習活動・内容 □ ・・・「声に出して読むこと」の活動	教師の支援	★評価規準：B基準 （　）評価方法 手だて　※A児童へ ＊C児童へ
第一次	1	○「スイミー」の範読を聞いて感想を持つ。	・範読を聞く。 ・範読を聞いたり，挿絵を見たりして，感想を書く。 □ 範読を聞く	○座っての本読みの姿勢の確認する。 ○分からない漢字・語句をチェックさせる。	評価【関・意・態】 ★スイミーを読み，感想を発表することができる。 （発表・観察） ※理由も入れた感想発表をさせる。 ＊どこが心に残ったかを挿絵をもとに考えさせる。 評価【読むこと】 ★粗筋をつかむことができる。
	2	○全文を通読し話の粗筋をつかむ。	・口形・姿勢・発声の確認をする。 「口の体操」「唇の体操」 「舌の体操」 ・全文を通読する。 ・新出漢字や語句の確認をする。 □ 追い読み　→　一人読み　→ 一斉読み	○姿勢図・口形図で確認する。 ○発音の難しい語句は全員で練習をさせる。 ○一人読みの際は個人差が目立たないようにする。 ○自分のペースで読める時間の確保をする。	
第二次	3	○ひとまとまりの語や文として読む。 ○スイミーたちの楽しい暮らしを想像する。	・発音・発声の練習 「あいうえお」あらいけいこ ・第一場面を読み，兄弟たちと楽しく暮らしている様子を想像する。 ・スイミーになったつもりで自己紹介をする。 □ 追い読み　→　一斉読み　→ 一人読み　→　列毎に一文読み →　となりと一文読み	○「声に出して読むこと」の際には，姿勢，声の大きさ，正確さを褒める。 ○兄弟でいることの楽しさを押さえ，ひとりぼっちになった時と対比させる。 ○ペープサートをもって自己紹介をさせる。	評価【読むこと】 ★スイミーたちの楽しい暮らしを想像することができる。 （発言・発表・観察） ＊自分の経験を思い起こさせる。 ※自分なりの言葉で発表させる。
	7 本時	○ひとまとまりの語や文として読む。 ○スイミーがしたことと，スイミーの気持ちを想像する。	・発音・発声の練習 「あいうえお」あらいけいこ ・スイミーがしたことと，スイミーの気持ちを想像する。 □ 追い読み →　一斉読み　→ となりと一文交代速読　→ 一人で速読 → 役割読み → 教師対児童全員の一文交代速読 →　役割読み	○スイミーがしたこととその時の気持ちを考えさせる。 ○元気を取りもどしたスイミーと赤い魚たちが岩陰にいる訳と気持ちを考えさせる。 ○「赤い魚」と「スイミー」の二つに分けて「声に出して読むこと」をさせる。	評価【読むこと】【言語】 ★ひとまとまりの語や文として読むことができる。（発言・観察） （評価カード） ★スイミーの気持ちが想像できる。 （ﾜｰｸｼｰﾄ）（発言） ★場面の様子が表れるように「声に出して読むこと」ができる。 （発言・観察） （評価カード） ※内容が分かるように読む事を意識させる。 ＊側へ行って一緒に読む。 動作化させることでスイミーの気持ちを想像させる。
	8	○ひとまとまりの語や文として読む。 ○スイミーの作戦と決まりを読みとる。	・発音・発声の練習 「食べもの」　中江敏夫 ・追い出される大きな魚の気持ちを想像し，ペープサートを使って場面の様子を表す。 ・スイミーが考えた作戦について考える ・場面の様子が表れるように「声に出して読むこと」をする。 □ 一斉読み →　一人で速読　→ グループで役割読み　（発表）	○作戦と決まりに線を引かせる。 ○スイミーの教えた事を考えさせて赤い魚を移動させる。（ﾍﾟｰﾌﾟｻｰﾄ） ○グループ単位で「声に出して読むこと」をさせる。	
	9	○大きな魚を追い出したときの気持ちを想像し，読む。	・第五場面を読み，「声に出して読むこと」の仕方を考える。 □ 一斉読み　→ 役割読み（動作化）	○自由になった喜びを感じとらせる。 ○自由に泳げる喜びを伸び伸びと「声に出して読むこと」で表現させる。	評価【読むこと】【言語】 ★場面の様子が表れるように「声に出して読むこと」ができる。 （発言）
第三次	10	○読み方を工夫してすきな場面の「声に出して読むこと」をする。	・好きな場面を選び，「声に出して読むこと」の練習をする。	○図画工作と生活科と関連させる。	評価【関・意・態】 ★熱心に練習している。
	11		・音読発表会をする。 （発表方法は選ばせる。） □ 指名読み（発表会）	○「声に出して読むこと」の発表会の形態を工夫する。	★友達の発表でよいところを見つけている。 （観察）（ワークシート）

6　本時の指導

(1) 本時の指導目標

- 第四場面を「声に出して読むこと」の活動を通して，ひとまとまりの語や文として読むことができる。【読むこと　エ】
- スイミーがしたこととスイミーの気持ちを想像する。【読むこと　ウ】

(2) 授業仮説

文章を読む際，「声に出して読むこと」をいろいろな形態で活動することで，意味内容が明瞭になるように，拾い読みでなくひとまとまりの語や文として読むことができるであろう。

(3) 本時の展開　　（7/11）

	学習活動内容　□・・・めあて　□・・・声に出して読む活動	教師の支援・留意点	★評価規準：B基準 （　）評価方法 手だて※A児童へ
導入 5	1　発声・発音練習をする。 「あいうえお」　あらいけいこ 2　今日の学習のめあての確認をする。 スイミーのしたこととそのときのスイミーの気持ちを考えよう。	・起立の状態で行う。 ・母音の口形に気をつけさせる。 （姿勢図，口形図確認） ・声の大きさに気をつけさせる。 ・めあては板書しながら，ワークシートに書かせる。	評価の観点 ★【読むこと】 ひとまとまりの語や文として読むことができる。 （観察）（自己評価） ※点や丸に気をつけて，内容が分かるように読むように声かけする。 ＊側に行って一緒に読む。
展開 35	3　第四場面をいろいろな形態で読む。 追い読み　→　一斉読み　→　列毎に一文交代読み　→　男女別一文読み　→　一人で速読　→　教師対児童全員で一文交代速読	・姿勢や声の大きさ，正確さをほめる。 ・読み間違いは，もう一度読ませる。 ・発音が難しい箇所は全員で発音させる。	
	4　スイミーがしたことに線を引く。 ①スイミーは見つけた， ②スイミーは言った。 ③スイミーは考えた。 いろいろ考えた。 うんと考えた。	・確認しながら一緒に線を引く。	評価の観点 ★【読むこと】 ・スイミーの気持ちを想像することができる。（発言） （ワークシート）
	5　ワークシートに書く。	・確認しながら一緒に書く。	
	6　そのとき，スイミーはどんな気持ちだったか考える。 ①スイミーは見つけた， ②スイミーは言った。 ○「出てこいよ。・・」と言ったスイミー ――――　うれしい。おどろいた。 の気持ちが出るように，工夫して読む。 ○「だめだよ。・・」と言った赤い魚たちの気持ちを考え，気持ちが出るように，工夫して読む。 ――――　おもしろいよ。 ○「だけど，・・」と言ったスイミーの気持ちが出るように，工夫して読む。 ――――　なんとか考えなくちゃ。 ③スイミーは考えた。 いろいろ考えた。 うんと考えた。	そのとき を確認する。 ・スイミーが元気を取り戻したとき。 ・言ったことに囲みを入れる。 ・どんなふうに言えばいいか考えさせる。 ・言ったことを板書する。 ・どんなふうに言えばいいか考えさせる。 そこに を確認する。 岩かげをさす。 ・言ったことを板書する。 ・どんなふうに言えばいいか考えさせる。 ・どうして岩かげにいてはいけないのか考えさせる。 ・時間や労力を費やしたことを感じ取らせる。 ・長いこと必死で考えたことを捉えさせる。	評価の観点 ★【読むこと】 ・スイミーと小さな魚たちとのやり取りを理解し，場面の様子が表れるように「声に出して読むこと」をしている。 （発言・観察） （評価カード）
	7　ワークシートに気持ちを書く。	・黒板を見て書かせる。	
終末 5	8　スイミーと赤い魚になって会話を読んでみる。 グループで役割よみ　→　発表	・スイミー　・・・強くなり，自信のある声。 ・赤い魚たち・・・おそれているおどおどした声。	
	9　自己評価をする。	・ワークシートを書かせる。	

7　授業仮説の検証

本時は，「声に出して読むこと」をいろいろな形態で活動することで，意味内容が明瞭になるように，ひとまとまりの語や文として読むことができるようにすることをねらいとした。

以下に授業の分析と考察を示す。

(1) いろいろな形態で「声に出して読むこと」をすることで，意味内容が明瞭になるように，ひとまとまりの語や文として読むことができるようになったか。

これまで，いろいろな形態で「声に出して読むこと」を行ってきた。毎時間の中で，児童に，姿勢，口形，声の大きさ，句読点などに気をつけるように指導をした。児童もそれらを意識して「声に出して読むこと」を行うようになった。

本時は第７時間目で，児童全員が参加できる形態を６種類取り入れたため，児童全員が６回は「声に出して読むこと」を行ったことになる。ひとまとまりの語や文として読むことができるためには，はっきりとした発音で，適度な大きさで，句読点に気をつけて読むことができなければならない。児童の様子を観察していると，声に出して読む活動を積極的に行い，発音，声の大きさ，句読点に気をつけて，ひとまとまりの語や文として読んでいた。

また，図１の授業後の自己評価から分かるように，28人（29人中）の児童がはっきりとした発音で，大きな声で句読点に気をつけて読むことができたとある。いろいろな形態で読む機会を多く取り入れたことで，ひとまとまりの語や文として読むことの能力を伸ばすことができたといえる。

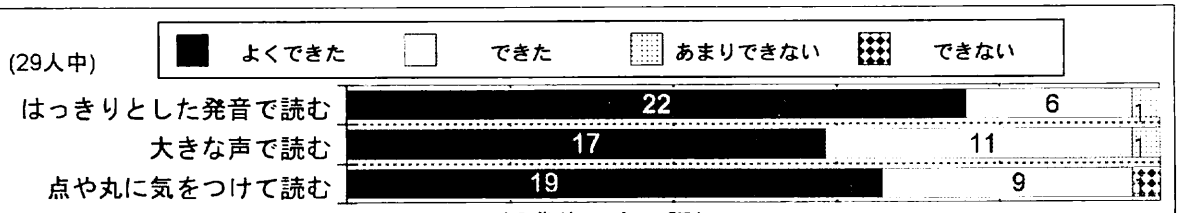


図１　授業後の自己評価

Ⅳ　研究全体の考察

1　教師の範読を聞き，「声に出して読むこと」を多く取り入れる工夫をすること，第二次から導入時に発音・発声練習を入れたことで，はっきりとした発音で文章を読むことができるようになったか。

はっきりとした発音で読むことができたかを判断するために，姿勢，口形，声の大きさの３項目について教師による実態調査と児童の意識調査を行った。

図２は実態調査であり，４段階評価で実施した結果である。１は「できない」，２は「あまりできない」，３は「ややできる」，４は「できる」である。授業前に比べると授業後は姿勢，声の大きさが平均2.5から3.5へ，口形は2.4から3.6へと上がった。

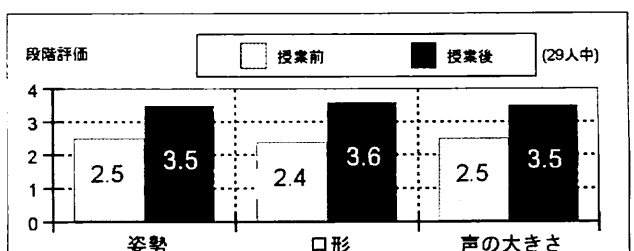


図２　「声に出して読むこと」の実態調査

図３は，「できた」「できない」の２択で意識調査を実施した結果である。授業前は口形，声の大きさは「できた」が80%であったのが，94.6%へ上がった。特に姿勢については，33.3%から89.7%へと高い伸びになった。

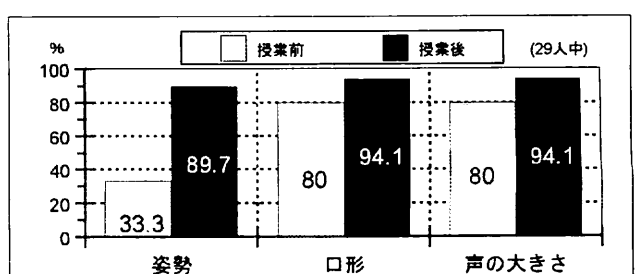


図３　「声に出して読むこと」の意識調査

以上の結果より，はっきりとし発音で文章を読むことにできるようになったと考察できる。

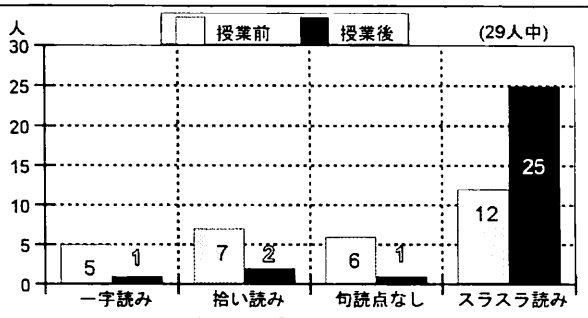
2　交代読みや一人読みなどの「声に出して読むこと」のいろいろな形態を取り入れる工夫をすることで，意味内容が明瞭になるように，拾い読みでなくひとまとまりの語や文として読むことができるようになったか。

意味内容が明瞭になるように，ひとまとまりの語や文として読むことができるようになったかを判断するために，句読点に気をつけながらスラスラと読んでいるかの実態調査を行った。

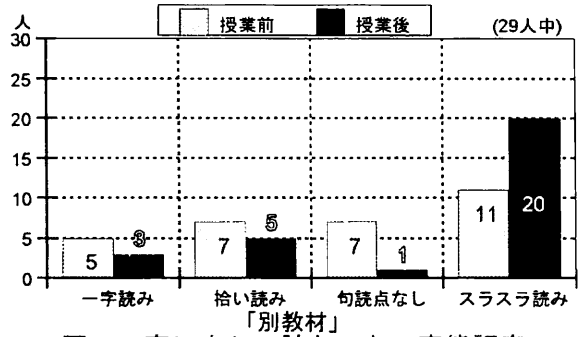
図４は，教材「スイミー」の「声に出して読むこと」のテストである。授業後は，スラスラ読みが12人から25人（29人中）になった。

また，図５は授業では扱わない別の文学的文章教材の「声に出して読むこと」のテストの結果である。スラスラ読みが11人から20人になった。これらの結果から，教材をいろいろな形態で「声に出して読むこと」を行ったことは，ひとまとまりの語や文として読むことができる能力を育てるのに有効であったといえる。

さらに，低学年での「声に出して読むこと」のねらいは，主に理解のためである。そこで，内容を理解できているかを判断するために，授業後に教材「スイミー」の単元テストと授業では扱わない別の文学的文章教材のテストを実施した。その結果，「スイミー」は平均点87.4点，別教材は88.5点であることから，内容理解もできたといえる。



教材　「スイミー」
図４　声に出して読むことの実態調査



「別教材」
図５　声に出して読むことの実態調査

Ⅴ　研究の成果と今後の課題

1　研究の成果

(1) 第一次に教師の範読と「声に出して読むこと」の機会を多く入れたこと，第二次の毎時間の導入時に発音・発声練習を入れたことで，児童は，正しい姿勢，良い口形，適度な声の大きさを意識しながら，「声に出して読むこと」ができるようになった。

(2) 第二次でいろいろな形態を組み合わせて「声に出して読むこと」を行ったことで，句読点を意識しながら読むことができるようになり，意味内容が明瞭になるように，ひとまとまりの語や文として読むことができるようなった。

(3) 読むことの能力を高めたことで，内容理解を促すことができた。

2　今後の課題

(1) 一単元だけで，「声に出して読むこと」の能力を定着させることは難しく，これからの継続的な指導が必要であり，説明的文章，詩等，他教材での指導の工夫を図りたい。

(2) 教材文を読める楽しさや自信から，他の図書を読むことに波及させ，読書生活を広げさせたい。

＜主な参考文献＞

石田佐久馬編　『音読を読みとりにどう生かすか』　東洋館出版　1994年
藤田慶三編　『子どもが輝く国語科授業　読むこと編』　東洋館出版　2002年
井上一郎編　『確かな国語力をつける授業モデル　読むこと編』　明治図書　2004年